latest information

進路指導に役立つ
最新情報

ICT化、アフターコロナ…etc. 大きく変わりつつある教育の世界

令和時代の教員に求められる 複雑化・多様化する課題に対応する力

今、社会が大きく変わろうとしているのは、多くの学校の先生も実感しているところだろう。教育の世界も変化の真っ只中にあり、今後も激しい変化の時代は続いていく。そんな次世代の教師像とはどのようなものなのか。次世代の教師を育成するには何が重要になるのか。国立教育政策研究所 銀島 文氏の話を交えて解説する。

取材・文／伊藤敬太郎　イラスト／ミヤザキコウヘイ

社会が大きな変化を迎えているなか 教師に求められる力も変わってきている

AIやビッグデータなどテクノロジーによる産業の大変革である「第4次産業革命」、それらがもたらす新しい社会を意味する「Society5.0」。さらに、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字を取って未来の予測が難しいことを表現した「VUCA」。これら時代のキーワードに象徴されるように、今、社会および、人々の価値観は大きな変化の時代に足を踏み入れている。この変化は世界レベルで起きているもので、不可逆だ。

もちろん、社会はこれまでも常に進化・発展を続けてきたが、今の状況は、それらの部分的な進化や段階的な発展とは様相が異なる。この変化は、人々の価値観を根本から覆すようなパラダイムシフトであり、そのため、今までのやり方が通用しないという事態がさまざまな分野で起きている。

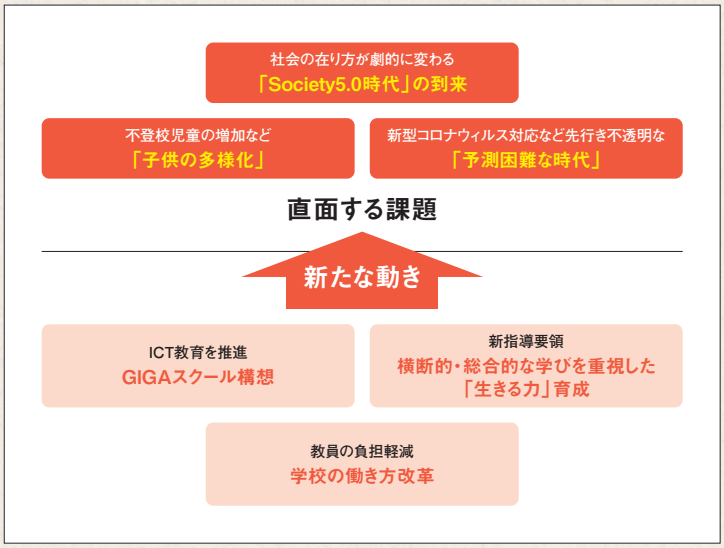
このパラダイムシフトへの対応は多くの分野・業界で大きな課題となっている。なかでも教育の分野は、変化の時代に対応できる人材、次世代を切り拓く人材を育成する重大な役割を担いつつ、同時に“教える側”である教師にもパラダイムシフトが求められている点で、課題はより大きいといえる。

文部科学省中央教育審議会は、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して（答申）」において、今、教育の世界が直面している課題と新しい動きについて整理している（図1）。社会のあり方が劇的に変わる「Society5.0時代」が到来するのと同時に、新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」に突入するなか、この変化に対応していくためにはどのような教育が求められるのか。また、特別支援教育を受ける児童生徒や外国人児童生徒の増加、貧困、いじめ問題に悩む児童生徒、不登校児童生徒数の増加などの子どもの多様化、教員の負担増に対してはどのような対応が求められるのか。これらの課題に対応するため、横断的・総合的な学びを重視した「生きる力」を育成する教育改革、ICT教育を進めるGIGAスクール構想の推進、学校の働き方改革など、教育の仕組みを変える試みが進められている。

では、そのような環境変化のなかで、今、個々の教師にはどのような資質や能力が求められるようになっているのだろうか。将来の職業として教師を目指す今の高校生はこれからどのような力を養っていけばいいのだろうか。

中教審が2021年に発表した資料「教師に求められる資質

図1 教育現場の課題と新しい動き



能力の再整理」では、教師に求められる資質・能力として、①使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力、コミュニケーション能力、ファシリテーション能力、②情報活用能力、データリテラシーの向上、③変化を前向きに受け止め、求められる知識・技能を意識し、継続的に新しい知識・技能を学び続けていくこと、④多様な知識・経験を持つ人材との連携の強化、の4つが挙げられている。

教師の学びにゴールはない。「学び続ける力」こそが重要

このうち、③の「変化に対応して学び続ける力」は極めて重要なポイントだ。「教員養成等の在り方に関する調査研究」などのプロジェクト研究に参加した経験をもつ国立教育政策研究所の銀島 文氏は次のように語る。

「変化が激しく予測不能なこれからの時代には、誰にも正解はわかりません。ですから、先生もすべてを知っている必要はないんです。一方で、今は、自ら知ろうと思えばいろいろな情報に手軽にアクセスできます。YouTubeなどの動画で専門的なことを学ぶことだって可能ですよね。子どもと一緒に、新しい課題に取り組み、一緒に学ぶことが大切なんです。それこそが、今、必要とされている主体的・協働的に課題を解決する力にもつながっていきます」

前述のように、探究学習など、横断的・総合的な教育が求められるようになっている今、教師に求められる知識の幅も広がっているように感じられる。しかし、一人の教員が担当教科の枠を超えて幅広い知識を身につけることには限界がある。銀島氏の言葉にある通り、すべてを知っている必要はない。むしろ重要なのは、社会のさまざまなことに関心をもち、自ら興味を抱いて学び続ける力だ。

そのように自分の専門領域外にも広く目を向けると同時に、教育全般や教科教育についても、自分自身で深く探究していくことが、一方では、教師としての専門能力を磨くことになると銀島氏は語る。

「例えば、数学の先生は、公式を伝えることだけが仕事ではありません。『この公式は何のために必要なのか』『この理論を学ぶ理由は何なのか』といった本質的な部分を子どもたちに伝えていくことも大切な役割です。そのためには先生自身がまず教科の内容に関して、『何のためにやるのか』を深く考えることが大切です」

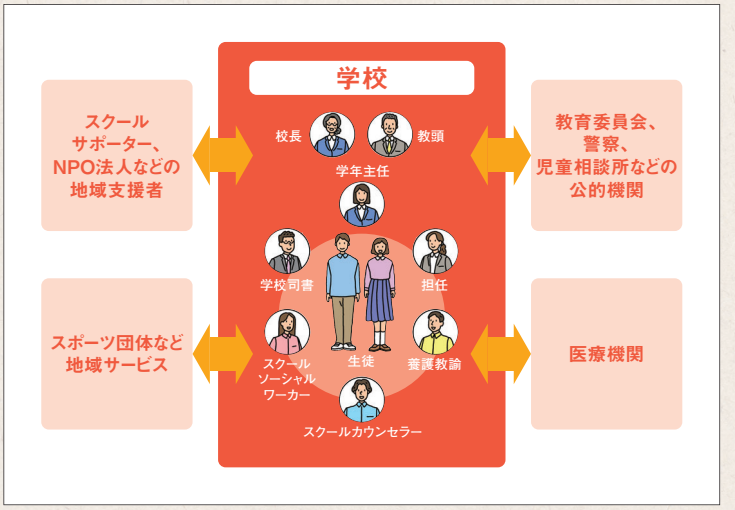
このように教育や教科の本質を問う思考を重ねていくことは、教師としての専門性を養うと同時に、改めて学ぶ楽しさを自ら体感することにもつながる。教師自身が学ぶ楽しさを知っているからこそ、子どもたちにもそれを伝えることができる。アクティブ・ラーニングや探究学習などにおいて、子どもが主体的に学ぼうとする意欲を喚起するためには、マニュアル的なテクニックよりも、そのような教師自身の学びに向かう姿勢が重要になると銀島氏は語る。

今後、GIGAスクール構想が進み、デジタル教材の活用なども広がるなかで、②で示した情報活用能力やデータリテラシーも、養成段階である程度身につけることが当然重要になるだろう。しかし、テクノロジーの進化は日進月歩だ。常に新しいテクノロジーやツールが生まれてくるため、それらを授業などでどう活用するかを教師自身がそのつど考えることが必要になる。つまり、ここでも「学び続ける力」が鍵を握ることになる。

ここまで説明してきたように、養成期段階や若手の時期はもちろん、中堅、ベテランになっても「学び続ける」のがこれからの教師のキャリアイメージだ（図2）。では、教育学部などで学ぶ養成期段階では何を重点的に学んでおけばいいのだろうか。教科に関する専門知識、授業力、学校組織内におけるマネジメント能力など、教師としての専門能力は、養成期段階でも当然基礎を学ぶことになるが、これらの要素は現場で経験を重ねながら磨かれていく余地も大きい。学び続ける力が備わっていれば、キャリアを重ねながら磨いていくことが可能だ。一方、「教職に対する情熱」や「総合的な人間力」は、前述の「教師に求められる資質・能力」でいうと、①に相当する教師としての土台と

図2 「学び続ける教師」のキャリアイメージ

図3 「チーム学校」のイメージ図解



なる力だ。もちろん、これらもキャリアを重ねながらより強化されていく面はあるが、養成期段階でこの土台をしっかりと形作ることが、教師となったあとに現場で学び続ける原動力となる。

多様化・複雑化する課題に対応するには「チーム学校」による連携体制が重要に

次にポイントになるのが、④の多様な知識・経験を持つ人材との連携の強化だ。ここで注目されるのが「チーム学校」という考え方。前述のように、教育現場の課題は多様化・複雑化している。不登校、いじめ、保護者対応などの問題が増加すると同時に、それらに対応する教師の負担が重くなりすぎている問題などもある。

チーム学校とは、これらを解決するために、教師一人が問題を抱え込むのではなく、学校内のそれぞれの分野の専門家、学校外の地域の専門機関・専門家などが連携・協力する体制のこと。図3で示したように、学校内では、校長・教頭がチーム学校全体のマネジメントを担い、担任、学年主任、養護教諭、スクールカウンセラー、学校司書などの専門家がそれぞれの専門性を活かして生徒と向き合い、生徒の学びや成長、問題などに対応していく。学校外では、スクールサポーターやNPOなどの地域支援者、教育委員会や警察、児童相談所などの公的機関、医療機関、スポーツ団体なども学校と連携を取り、協力して児童生徒を支援する。もちろん、今までも学校と地域との連携は図られていたが、情報共有や協力体制をより明確に、強固にしていこうという取組だ。

2016年に公表された「『次世代の学校・地域』創生プラン」では、学校外に地域住民や保護者、NPOなどで組織された地域学校共同本部を置き、地域コーディネーターと呼ばれる人たちが連携の中核を担う教職員とつながって学校と地域を結びつけていくというモデルが示されている。

「学校や教師に求められる役割が増えているため、それに対応できる人材を配置していきましょうということですね。それを学校内にとどめず、地域資源も活かしていこうというかたちで体制づくりが進められています」(銀島氏)

ここで重要になるのは、個々の教師がいろいろな地域資源や専門家の役割や機能を理解すること。スクールカウンセラーやソーシャルワーカーといった専門家にはどのようなことが可能なのか、地域資源にはどのようなものがあるのかを教師自身がわかっていることで、適切な連携が図れるようになるからだ。その意味では、養成期段階においてもチーム学校の概念をしっかりと理解して教育を学ぶことが大切になる。

さて、ここまで見てきたように、社会の課題、および教育における課題が多様化・複雑化してきているなかで、教師に求められる資質・能力も高度化・多様化・複雑化してきている。将来、教師になることを志望している生徒は、このような力を身につけるため、進学先を選ぶ際には何を重視したらいいのだろうか。

一つには、教育学部で4年間、しっかりと教育学や先端的な教育課題について学ぶことの重要性が挙げられる。もちろん、短大や他学部の教職課程で教員免許を取得する道もあるが、教師としての土台の力を強固にすることを意識するなら4年制教育学部は第一の選択肢となる。ひとくちに教育学部といっても大学によって取得できる免許に違いがある。幼小連携、小中連携なども重視されるようになっている今、幼稚園・小学校、小学校・中高などの免許のダブル取得が目指せるかどうかといったことも進学先を検討する段階でしっかりと情報収集しておきたい。

また、教師としての土台の力を養うために重要と考えられるのが現場での学びだ。教員免許を取得するためには学校での教育実習が必須だが、それだけでなく、インターンシップなど現場で学べる機会が豊富にある大学であれば、リアルな現場の課題、多くの教師の生の授業、多様な子どもとの、あるいは学内外でのコミュニケーションなどに関して、実地で体験しながら学ぶことができる。このような経験が、総合的な人間力や教職への情熱を高めていくことにもつながる。そのため、さまざまな学校との連携体制や実習の豊富さなども重要なチェックポイントの一つだ。

教師を志望する高校生のなかには、「教師にはなりたいが、どの免許がいいのかはまだ決まっていない」という人もいるはず。実際、現場を知る前に免許の種類を決めるのは人によっては難しい。その場合には、進学後、ある程度教育について学んでから取得する免許を選べ、キャリアに関してじっくり検討する余地のある大学なども選択肢に入るだろう。